

(3) ダルクにおけるMSM・HIV陽性者支援の調査 — ダルクにおける性的少数者・HIV陽性者受入の現状と課題に関する質問紙調査 —

研究分担者：樽井 正義(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究協力者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

徐 淑子(新潟県立看護大学)

山本 大(特定非営利活動法人アパリ、藤岡ダルク)

研究要旨

目的 本研究は、ダルクにおける男性とセックスをする男性(MSM)を含む性的少数者および HIV 陽性者の受け入れの現状と課題を明らかにする、初めての試みである。

方法 各ダルクにおける運営、性的少数者の受入と HIV 陽性者の受入の現状と課題、HIV の現状理解に関する質問紙を作成して全国のダルク 54 力所に発送し、34 力所から得られた回答を分析した(回収率 63.0%)。

結果 今回調査に参加したダルクのうち、性的少数者を受け入れたことがあると回答したのは、93.0% となった。2019 年では受入施設に平均 1 人以上、全施設全利用者に占める割合は 5.3% だった。受入施設の 45.2% が受け入れに際して、他の利用者による偏見や差別、恋愛や性のトラブルへの懸念があったと答えたが、48.4% の施設で、セクシャリティについてのワークショップの開催、居室の調整等を行っていた。

HIV 陽性者を受け入れたことのない施設は 26.5%、ある施設は 73.5% で、その 5 分の 1 から 2 の施設に 1 人から 3 人入所していた。受け入れたことがない施設でも、問合せを受けて断った施設はなく、受入に懸念があると答えたのは 55.6%、ないと答えたのは 44.4% で、懸念の内容は、感染の予防、差別やいじめ等であった。受入施設では、懸念がなかったのは 60.0%、あったのは 32.0% で、懸念の内容は、偏見や差別、医療機関とのつながり、個人情報共有範囲等だった。56.0% の施設で、HIV 理解と感染予防をはかる勉強会の開催等が行われていた。陽性者の治療に関して困難があったとした施設は少数だが、刑務所との連携や歯科による診療拒否が挙げられた。

考察 今回調査では、ダルクにおける性的少数者の受け入れ経験率は 9 割、HIV 陽性者の受け入れ経験率は 7 割を超えていた。調査に参加していないダルク全てが受け入れをしたことがないと仮定しても、過半の施設で、それぞれの受け入れ経験を有すると考えられた。陽性者受入施設では、HIV への理解をはかり環境の整備が進められており、HIV についてさらに知りたいという施設は 16.0% にとどまるが、治療費の助成制度や治療による感染予防効果(U=U)といった陽性者支援に有用な情報が十分に知られてはいない(67.6%、52.9%)。HIV に関わる医療者と支援者には、より積極的な情報の提供が求められる。

結論 大半のダルクが性的少数者と HIV 陽性者を受け入れており、安心して回復に取り組める環境整備がはかられている。陽性者と薬物使用者への支援、感染と薬物使用の予防を進めるために、それぞれの支援者による情報共有と連携が求められる。

A 研究目的

私たちの社会における HIV 感染経路に占める注射薬物使用の割合は大きくはないが、陽性者の多数を占める男性とセックスをする男性(MSM)の性感染には、少なからず薬物使用が関わっていることが指摘されており、HIV 感染と薬物使用を予防するには、薬

物使用に関する理解と使用者に対する支援が求められる。

本研究は、薬物依存症回復支援施設であるダルクにおける、MSM を含む性的少数者および HIV 陽性者の受け入れの現状と課題を、質問紙調査によって明らかにする。これを踏まえて、MSM の HIV 感染と薬物使用の予防に資する支援策を検討し、HIV 感染予

防、陽性者支援、および薬物使用者支援を行っている NGO、行政、医療機関などに提言を行うことを目的とする。

B 研究方法

ダルクの 2 施設の職員への面接調査と先行研究によって、その運営の現状について概観し、これを踏まえて、(A)各ダルクの運営、(B)性的少数者の受入と (C) HIV 陽性者の受入の現状と課題、(D) HIV の現状の理解に関する質問紙を作成した(前年度、1 年目)。

質問紙を、日本カトリック依存症者のための会 (JCCA) 作成の「薬物依存症施設情報一覧」(<http://jcca-catholic.jp/shisetsu.html>) に調査時点で収載されていた全国のダルク 54 カ所に郵送して回答を無記名(回答施設名の記載なし)で回収し、これを集計・分析した。調査期間は 2019 年 9 月 17 日から 10 月 31 日とした。(本年度、研究年次 2 年目)。

本年度得られた調査結果を、ダルクおよび MSM の HIV 感染予防・陽性者支援を行っている NGO とに還元し、両組織のメンバーに対する研修を実施して、情報の共有と連携の促進を行う予定である(次年度、3 年目)。

C 研究結果

ダルクにおける性的少数者・HIV 陽性者受入の現状と課題に関する質問紙調査

全国のダルク 54 カ所のうち 34 カ所から質問紙に対する回答を得た(送付数 54、回収数 34、回収率 63.0%)。その集計結果から、施設の運営、性的少数者および HIV 陽性者への対応、HIV の現状に関する知識について概括する。

(A)ダルクの運営

運営を担う専任職員は、施設により 0 人から 11 人と異なっているが、平均して 1 施設あたり 4.5 人、約 3 分の 2 の施設には非常勤職員と研修スタッフもおり、これにも巾があり最多は 9 人と 12 人だが、全施設にならずと 1.3 人と 2.1 人だった(集計結果項目 A 【2】)。

運営しているプログラムは入所と通所に分か

れ、両方運営している施設は 3 分の 2 弱(22 施設、64.7%)、入所のみが 3 分の 1 弱(11 施設、32.4%)、通所のみは 1 施設のみ(2.9%)だった(同 A 【4】、以下、項目番号のみ記す)。

プログラムの利用者数は、回答のあった施設の平均では過去 1 年間で入所は 35.3 人、通所は 10.4 人、1 日平均では入所は 18.3 人、通所は 5.0 人だった(A 【5】)。

利用者の依存対象は主として薬物であり、利用者の全員から 6 割が薬物使用と回答した施設が 82.3%(28 施設)、半数以下は 14.7% (5 施設)だった。多くの施設がアルコール依存にも、薬物との重複依存も含めて対応しているが、そうした利用者が半数を超えるのは 1 施設(2.9%)だけで、多くは 1 割から 4 割を占め(25 施設、73.5%)、1 割以下ないしゼロの施設は少数だった(7 施設、20.6%)。物質依存だけでなくプロセスないし行為依存にも対応している施設もあり、利用者の半数を占めている 1 施設(2.9%)を除けば、他(13 施設、38.2%)は 2 割以下であり、そのほとんどがギャンブル依存だった(A 【6】)。

運営への公的補助金の受給については、「障害者総合補助法」に基づき、「共同生活援助」(グループホーム)、「生活訓練」、創作・生産等の「地域活動支援センター」の事業を行っている施設は 67.6% (23 施設)、刑務所出所者の再犯防止策の一環である「緊急的住居確保・自立支援対策」として「自立支援ホーム」の事業を行っている施設は 82.4% (28 施設)であり、いずれも受けていないと回答した施設はなかった(A 【3-1】および【3-2】)。

(B)性的少数者の受入

性的少数者を受け入れたことのある施設は回答したダルクの 93.0% (31 施設)、ない施設は 7.0% (3 施設)だった(B【1】)。今回調査の回収率は 63.0% であったが、調査に参加していないダルク(20 施設)全てが受け入れたことがないと仮定し再集計しても、ある 54.7%、ない 42.6% となり、性的少数者受け入れの経験は 5 割を超えていた。

2011-15 年以降は半数以上の施設で受け入れられており、3 分の 1 から 2 の施設に 1 人か 2 人以上(最多は 10 人)、ならしてみればどの施設にも 1 人いることになる(Bb 【1】)。

受入への懸念は、受け入れたことのない施設はいず

れもないと答えたが(Ba【1-1】)、受け入れたことがある施設では、懸念はなかったのは51.6% (16施設)、あったのは45.2% (14施設)だった(Bb【2-1】)。懸念の内容として挙げられたのは、他の利用者からの差別や偏見、恋愛や性に関わるトラブル、集団での生活や入浴等だった(Bb【2-2】)。

受け入れたことのある施設で、受入について工夫したことがある施設は48.4% (15施設)、ない施設は45.2% (14施設)だった(Bb【4-1】)。工夫の具体例として、回答した3分の1の施設が挙げたのは、理解をはかるワークショップの開催、居室の調整であり、その他にはLGBTミーティング(NA)への参加、水泳や入浴への考慮、恋愛や性への配慮、カミングアウトについて本人の意向の尊重等が行われていた(Bb【4-2】)。

性的少数者に関連するNGOを知っているかという問いに対しては、64.5% (20施設)が知っている、19.4% (6施設)が知らないという回答だった。ダルクを含む他のNGOに相談したことがあると答えたのは、受け入れたことのある施設の9.6%(3施設)だった(Bb【3-1】および【3-2】)。

(C) HIV陽性者の受入

HIV陽性であることを明らかにしている利用者を受け入れたことのある施設は回答したダルクの73.5% (25施設)、ない施設は26.5% (9施設)だった(C【1】)。今回調査に参加していないダルク(20施設)全てが受け入れたことがないと仮定し再集計しても、ある46.3%、ない53.7%となり、HIV陽性者の受け入れの経験は5割近い。

そして、5分の1から2の施設に1人から3人(最多は8人)受け入れられている(Cb【1】)。

受け入れたことがない施設でも、問合せを受けて断ったという施設はないが、受け入れに懸念があると答えたのは55.6% (5施設)、ないと答えたのは44.4% (4施設)だった。懸念の内容として挙げられたのは、感染の予防、差別やいじめ、それらに対応することの負担、治療へのサポート、HIVに関する知識の不足、等だった(Ca【1-1】および【1-2】)。

受け入れたことがある施設では、受け入れに懸念がなかったのは60.0% (15施設)、あったのは32.0% (8施設)だった(Cb【2-1】)。懸念の内容として約半数の施設が挙げたのは、職員や利用者による偏見や差

別、陽性者への関わり方の途惑い、医療機関とのつながり、さらには個人情報の共有範囲等だった(Cb【2-2】)。また受入の際に、68.0% (17施設)の施設が本人の要望を聞き、32.0% (8施設)がダルクを含む他のNGOや医療機関に相談していた(Cb【5-1】)。

陽性者の入所前後の治療継続について、84.0% (21施設)が円滑だったと答えたが、4.0% (1施設)が、刑務所から医療機関への移行が円滑ではなかったと答えた(Cb【3-1】および【3-2】)。

入所中の治療については、76.0% (19施設)の施設が困っていることはない、12.0% (3施設)があると答えた。困っていることとして、病院との連携が地理的にとりにくいこと、陽性を伏せている複数の利用者が出会わないよう別々の病院で予約をとること、施設が利用している歯科から診療を断られたことが挙げられた(Cb【4-1】および【4-2】)。

受入について工夫したことがある施設は56.0%(14施設)、ない施設は36.0% (9施設)だった。工夫の具体例としてほとんどの施設が挙げたのは、HIVを理解し感染予防(肝炎や風邪を含む)をはかる勉強会の開催であり、そのために保健師等外部の専門家への講師依頼や外部の研修会等への参加が行われていた。また感染予防として、出血への対処方法の学習、使用したカミソリの廃棄、使いすて手ぶくろの設置で、居室の調整を行った施設もあった(Cb【6-1】および【6-2】)。

HIVについて知りたいこと、気にしていることがあるかという問いに、68.0% (17施設)がない、16.0% (4施設)があると答えた。あるとした具体的な内容は、より詳しい知識と正しい理解を得たい、治療のメンタルへの影響の有無、HIV新規感染や梅毒等他の感染症の動向について知りたい、ということだった(Cb【7-1】および【7-2】)。

HIV陽性の個人情報を共有している範囲は、過半の施設が本人の要望を聞いて決めているが、3分の1はスタッフと利用者、4分の1はスタッフのみとしていた(Cb【8】)。

(D) HIVの現状に関する知識

HIVの現状について、1施設を除くすべての回答者が知っている(97.1%、33施設)と答えたのは、ARVによる治療の延命効果(項目1)とコンドームによるHIVと性感染症予防効果(項目7)だった。自分が感染していることに気付かずにいるとセックスにより他

の人に感染させることがある(項目6, 88.2%)、セックスドラッグとしての薬物使用がHIV感染リスクや治療中断リスクとなる(項目8, 91.2%)ことも、周知率90%以上と広く知られていた。しかし、治療中の陽性者との注射器の共有による感染の可能性(項目5, 73.5%)、HIV治療の助成制度(項目2, 67.6%)はそれほど知られてはおらず、新しい知見である治療継続がウイルスを検出限界以下に抑えること(項目3, 58.5%)、その状態ではセックスによる感染はおこらないこと(項目4, 52.9%)を知っていると答えたのは6割にとどまった(D【1】)。

D 考察

回答したダルクにおける職員と利用者の人数はそれぞれに異なっているが、平均してみれば、4-5人の常勤職員が3人強の非常勤職員や研修スタッフとともに、18人の入所者、5人の通所の、主として薬物、さらにはアルコールやギャンブルへの依存からの回復を支援している、ということができるだろう。1日の平均入所利用者20人未満の施設がほとんどであるが、中には、1日平均60人以上が共同生活を送る規模の大きい施設も存在する。

今回の調査では、性的少数者を受け入れたことがあると回答した施設は9割以上であった。回収率からもっとも厳しい見積もりを仮定して再集計しても受け入れ経験率は5割以上となった。過半のダルクが、性的少数者の受け入れを経験しているのは確実であると推察される。

2019年では受け入れ経験のある施設に平均すれば1人以上、全施設全利用者に占める性的少数者の割合は5.3%であり、先行研究(嶋根 2017, 4.8%)と同様であった。参考までに、これらの数値は、一般人口における性的少数者の割合と変わらない。

受け入れ経験のある施設の半数弱(45.2%)が受け入れに懸念があったと答えた。一方で、他の利用者による偏見や差別、恋愛や性のトラブルへの懸念に対処する工夫として、半数(48.4%)の施設で、セクシャリティについてのワークショップの開催、居室の調整等、少数者への理解を促進し、性的少数者が安心して回復に取り組める環境づくりのために、何らかの対応が行われていた。

HIV陽性者を受け入れたことがあると回答した施設

は4分の3に近い(73.5%)。回収率からもっとも厳しい見積もりを仮定しても、HIV陽性者の受け入れの経験率は5割近いと考えられた。

受け入れたことがない施設の過半(55.6%)が受け入れに対して、差別や感染予防等の懸念があると答えたが、問合せを受けて断ったという施設はなかった。全国の施設の3分の2弱から得られた回答ではあるが、ダルクにおける陽性者受け入れの姿勢は、特記すべきことと思われる。

受け入れた施設でも3分の1(32.0%)は受け入れに懸念があったと答えたが、懸念された利用者による差別や偏見、陽性者への関わり方、医療機関との連携、個人情報の共有範囲等に対して、過半の施設(56.0%)が、外部の専門家に依頼してHIVの理解と感染の予防をはかる勉強会の開催、使用済みカミソリの廃棄やグローブの設置による感染予防等の工夫を行っている。また多くの施設が本人の要望を聞く(68.0%)、他のダルク等に相談する(32.0%)ことをしており、HIV陽性者の日常的なケアニーズを踏まえた対応が計られていた。

陽性者の治療に関しては、受入の際に1施設が刑務所からの移行が円滑ではなかったと答え、その後の治療では、3施設が拠点病院との連携や歯科での診療拒否を挙げているが、問題の指摘は少数にとどまった。また、HIVに関して知りたいこととして、より詳しい知識や感染症の動向等を挙げたのは4施設だった。

ダルクが陽性者受け入れに関して当面する問題も、HIVに関して求める知識も、多いとは言えない。しかし、ARVによる治療の延命効果、コンドームによる感染予防効果、感染を知らない人からセックスによる感染、薬物使用によるHIV感染と治療中断のリスクは広く知られているが、ダルクにとって有用と思われる、治療中の陽性者との注射器共有による感染の可能性、HIV治療への助成制度を知っているのは7割程度であり、さらに治療継続がウイルスを検出限界以下に抑え、セックスによる感染をなくすという新しい知見は、6割未満にとどまっている。HIVに関する新しく有用な情報の提供が求められる。

多くのダルクでは、前述したように、HIVを理解し、施設を利用する陽性者と未感染者が安心して回復に取り組めるよう、勉強会を開催し、知見をもつ他の団体に相談をしているが、相談先の3分の2は関連のある他のダルクであり、医療機関は3分の1にすぎない。

拠点病院を挙げたのは1施設にとどまり、HIVに関わるNGOは挙げられていない。

性的少数者に関連するNGOを知っているかという問いに対しては、ダルクと並んで関東と関西の陽性者支援NGOが挙げられ、実際に両団体と幾つかのダルクとの間には交流がある。HIVに関わる医療者と支援者には、薬物使用者の支援者に対して、HIVと陽性者に関する情報をより積極的に提供することが勧められる。

また他方で、HIV診療にあたる医療者、陽性者支援を行うNGOメンバーには、薬物使用への対応に少なからぬ困惑が見られる。薬物を使用する陽性者への支援を促進するために、ダルク等の依存回復支援の専門家から、薬物使用者への対応を学ぶ必要があるように思われる。

E 結論

本研究は、ダルクにおける男性とセックスをする男性(MSM)を含む性的少数者およびHIV陽性者の受け入れについて、その現状と課題を明らかにする初めての試みである。

薬物依存症回復支援施設であるダルクでは、その9割以上が性的少数者の、4分の3がHIV陽性者の受け入れを経験している。受け入れに懸念がなかったわけではないが、性的少数者とHIV陽性者への理解をはかり、ともに回復を目指すための共同生活が試みられている。

ダルクに対しては、HIV治療と陽性者支援の現状に関する情報提供が求められるとともに、薬物使用への対応を要するHIV診療と陽性者支援の場では、薬物使用と使用者への適切な理解がまだ十分とは言えない。薬物使用とHIV感染の予防、使用者と陽性者の支援を促進するには、HIV医療、陽性者支援の関係者と薬物依存、使用者支援の関係者のあいだで、情報の共有と支援の連携がさらに求められる。

参考文献

1) 近藤あゆみ他：刑の一部執行猶予制度の施行に向けた民間薬物依存症回復施設の実態把握と課題の解明に関する研究。平成28年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)「危険ドラッグを含む薬物乱用・依存

状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」分担研究報告書2017。https://www.ncnp.go.jp/nimh/yakubutsu/report/pdf/research7_2016-2.pdf

2) 近藤恒夫：拘置所のタンポポ - 薬物依存 再起への道。双葉社2009。

3) 嶋根卓也他：民間支援団体のコホート調査と支援の課題に関する研究。平成28年度厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)「刑の一部執行猶予下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究」分担研究報告書2017。https://www.ncnp.go.jp/nimh/yakubutsu/report/pdf/H28-4.pdf

4) ダルク編：ダルク 回復する依存者たち。明石書店2018。

5) 松本俊彦：薬物依存症。ちくま新書1333-4、筑摩書房2018。

F 研究発表

1. 論文発表

1) Koto G, Tarui M, Kamioka H, Hayashi K: Drug use, regulations and policy in Japan. International Drug Policy Consortium 2020. in print

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

なし

ダルクにおける MSM・HIV 陽性者支援の調査 集計

調査期間：2019年9月17日から10月30日

調査方法：郵送法による。送付数 54、回収数 34（うち無効票 0）、回収率 63.0%。

集計方法：無回答数も含む単純集計。枝問の場合は、上流の質問の回答から項目該当数を得、それを基にパーセントを算出した。

A あなたのダルクについて伺います

【1】運営している施設(デイケア、ホームなど)は複数ありますか

1. ない 26.5% (9) * 2. ある 73.5% (25) 0. 無回答 0% (0)
→ (「ある」と答えた施設)計 83 カ所(施設平均 3.3 カ所)

* カッコ()内は度数。以下、同様。

【2】職員は何人ですか

人数：1 施設の該当職員数

施設：上段は該当数職員がいる施設の割合 下段の()内は該当施設の数

常勤職員 1 施設平均 4.5 人

人数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人
施設	2.9%	8.8%	17.6%	8.8%	14.7%	8.8%	14.7%	11.8%	5.9%	2.9%		2.9%
	(1)	(3)	(6)	(3)	(5)	(3)	(5)	(4)	(2)	(1)		(1)

非常勤職員 1 施設平均 1.3 人

人数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人
施設	32.4%	41.2%	17.6%	8.8%	2.9%					2.9%		
	(11)	(14)	(6)	(3)	(1)					(1)		

研修スタッフ 1 施設平均 2.1 人

人数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	12人
施設	35.3%	20.6%	11.8%	8.8%	8.8%	5.9%	2.9%		2.9%			2.9%
	(12)	(7)	(4)	(3)	(3)	(2)	(1)		(1)			(1)

職員数合計 1 施設平均 7.9 人

運営について伺います

【3-1】障害者総合支援法に基づく施設ですか

1. はい 67.6% (23) 2. いいえ 26.5% (9) 0. 無回答 5.9% (2)

【3-2】 自立準備ホームの登録施設ですか

1. はい 82.4% (28) 2. いいえ 11.8% (4) 0. 無回答 5.9% (2)

【4】 プログラムの種類を伺います

1. 入所のみ 32.4% (11) 2. 通所のみ 2.9% (1) 3. 両方 64.7% (22)
0. 無回答 0% (0)

【5】 利用者はおよそ何人ですか

【過去一年間利用者数】平均 入所 35.3人 通所 10.4人

【一日平均 利用者数】平均 入所 18.3人 通所 5.0人

【過去一年間 入所】（項目該当数 33*） * 質問【4】回答選択肢「1. 入所のみ」および「3. 両方」を合算

利用者数	10人以下	10-20人台	30-40人台	50-70人台	300人	無回答
施設	12.1% (4)	39.4% (13)	9.1% (3)	9.1% (3)	3.0% (1)	27.3% (9)

【過去一年間 通所】（項目該当数 23*） * 質問【4】回答選択肢「2. 通所のみ」および「3. 両方」を合算

利用者数	10人以下	10-20人台	30-40人台	50-70人台	無回答
施設	43.5% (10)	8.7% (2)	4.3% (1)	4.3% (1)	24.2% (9)

【一日平均 入所】（項目該当数 33）

利用者数	10人未満	10人台	20人台	30人台	40人台	50人台	60人台	無回答
施設	24.2% (8)	33.3% (11)	6.1% (2)	6.1% (2)	3.0% (1)	0.0% (0)	6.1% (2)	21.2% (7)

【一日平均 通所】（項目該当数 23）

利用者数	10人未満	10人台	無回答
施設	52.2% (12)	17.4% (4)	30.4% (7)

【6】 薬物依存とアルコール依存の方等のおよその割合は（全ての施設への質問）

	100%	80-90%台	60-70%台	50%台	30-40%台	10-20%台	10%未満	0%	無回答
薬物	14.7%	29.4%	38.2%	8.8%	5.9%				2.9%
	(5)	(10)	(13)	(3)	(2)				(1)
アルコール				2.9%	38.2%	35.3%	8.8%	11.8%	2.9%
				(1)	(13)	(12)	(3)	(4)	(1)
その他*				2.9%		23.5%	14.7%	55.9%	2.9%
				(1**)		(8)	(5)	(19)	(1)

* ギャンブル、窃盗、セックス等

** ギャンブル

B 性的少数者の受入について伺います

【1】 性的少数者であることを明らかにしている利用者を受け入れたことがありますか
(全ての施設への質問)

1. ない 7.0% (3) →設問 a へ 2. ある 93.0% (31) →設問 b へ
0. 無回答 0% (0)

設問 a (設問 B 【1】で「ない」と回答した施設への質問)

【1-1】 受け入れることに懸念がありますか (項目該当数 3)

1. ない 100.0% (3) 2. ある 0.0% (0)
0. 無回答 0% (0)

【1-2】 できれば懸念の内容をお聞かせください (項目該当数 0)

【2-1】 性的少数者に関連する NGO (ダルクを含む)をご存知ですか (項目該当数 3)

1. 知らない 33.1% (1) 2. 知っている 66.6% (1) →設問【2-2】へ
3. 相談したことがある 0.0% (0)
0. 無回答 33.1% (1)

【2-2】 できれば団体名をお聞かせ下さい (項目該当数 1、項目無回答 1)

記述あり 0.0% (0) 記述なし 0.0% (0)

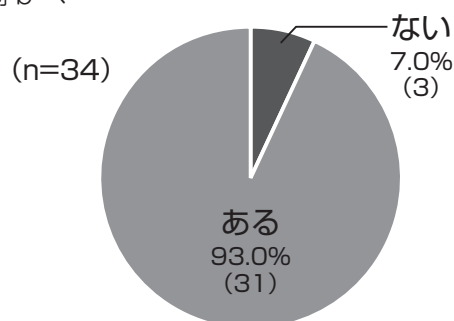
設問 b (設問 B 【1】で「ある」と回答した施設への質問)

【1】受け入れた人数をお教え下さい(項目該当数 31)

年	2006-10*	2011-15*	2016	2017	2018	2019**
利用者 0 人の施設数	19	14	17	18	14	11
1 人以下	1	2				
1 人	8	6	7	8	12	10
2 人	1	5	4	1	2	7
3 人	1	1	0	2	1	0
4 人	0	1	1	0	0	1
4 人以上 ***	0	1 (8 人)	1 (9 人)	1 (10 人)	1 (6 人)	1 (10 人)
無回答	1	1	1	1	1	1

* 5 年間各年平均 **2019 年 10 月現在

*** カッコ()内は、受け入れの具体的人数



性的少数者であることを明らかにしている利用者を受け入れたことがありますか

年	2006-10	2011-15	2016	2017	2018	2019
利用者数 / 受入施設 **	0.44*	1.06*	0.93	0.87	0.83	1.27
利用された施設 / 受入施設 ***	36.7% (11)	53.3% (16)	43.3% (13)	40.0% (12)	53.3% (16)	63.3% (19)

* 5年間各年平均 ** 受入経験のある1施設あたりの、その年の利用者数

*** 上段：受入経験のある施設のうち、その年に利用された施設の割合 下段：施設数

【2-1】受け入れることに懸念がありましたか（項目該当数 31）

1. なかった 51.6% (16) 2. あった 45.2% (14) → 設問【2-2】へ
0. 無回答 3.2% (1)

【2-2】（自由記述）できれば懸念の内容をお聞かせください（項目該当数 14）

記述あり 100% (14) 記述なし 0% (0)

（記述内容）

本人が他の利用者から「差別」や「偏見」なく受け入れられるか(6)、「恋愛」や「性」に関わるトラブルが起きないか(6)、集団での「生活」や「入浴」で問題はないか(5)、等。

【3-1】性的少数者に関連するNGO（ダルクを含む）をご存知ですか（項目該当数 31）

1. 知らない 19.4% (6) 2. 知っている 64.5% (20)
3. 相談したことがある 9.7% (3) → 設問【3-2】へ
0. 無回答 6.5% (2)

【3-2】（自由記述）できれば団体名をお聞かせ下さい（項目該当数 3）

記述あり 100.0% (3) 記述なし 0.0% (0)

（記述内容）

他のダルク(2) HIV 関連 NGO (1)

【4-1】受け入れについて、工夫されていることがありますか（プログラム、居室など）（項目該当数 31）

1. ない 45.2% (14) 2. ある 48.4% (15) → 設問【4-2】へ
0. 無回答 6.5% (2)

【4-2】できれば具体的にお聞かせ下さい（項目該当数 15）

記述あり 100% (15) 記述なし 0% (0)

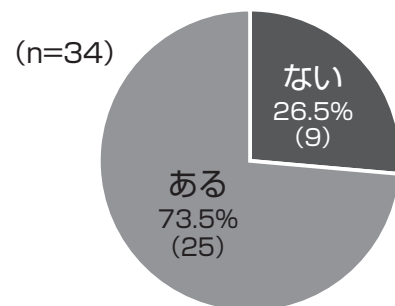
（記述内容）

理解をはかる「ワークショップ」等の開催(6)、「居室の調整」（個室、同室者の特定等、5）、NAの「LGBT ミーティング」への参加(3)、「水泳」「温泉」は場合によっては遠慮してもらう(2)、「恋愛」や「性」の問題には注意し相談するよう伝える(2)、「カミングアウト」は本人の意向による(2)、等。

C HIV 陽性者の受け入れについて伺います

【1】 HIV 陽性であることを明らかにしている利用者を受け入れたことがありますか

1. ない 26.5% (9) → 設問 a へ 2. ある 73.5% (25) → 設問 b へ
0. 無回答 0% (0)



設問 a（設問 C 【1】で「ない」と回答した施設への質問）

【1-1】受け入れることに懸念がありますか（項目該当数 9）

1. ない 44.4% (4) 2. ある 55.6% (5) → 設問【1-2】へ
0. 無回答 0% (0)

HIV陽性であることを明らかにしている利用者を受け入れたことがありますか

【1-2】（自由記述）できれば懸念の内容をお聞かせください（項目該当数 5）

記述あり 80% (4) 記述なし 20% (1)

（記述内容）

HIVに関する知識の不足、感染への不安、利用者間の差別やいじめの心配、教育に時間と金が必要、治療へのサポートの仕方。

【2-1】 HIVに関連する NGO（ダルクを含む）をご存知ですか（項目該当数 9）

1. 知らない 55.6% (5) 2. 知っている 33.3% (3)
3. 相談したことがある 0.0% (0) → 設問【2-2】へ
0. 無回答 11.1% (1)

【2-2】できれば団体名をお聞かせ下さい（項目該当数 0）

【3-1】 問合せがあって、受け入れなかった経験がありますか？ (項目該当数 9)

1. ない 88.9% (8) 2. ある 0.0% (0) 0. 無回答 11.1% (1)

【3-2】 その理由はなんですか？ (項目該当数 0)

1. 前例がなかったので 2. HIV 診療機関との連携がなかったため
3. 他の利用者との問題を避けるため 4. その他()

設問 b (設問 C 【1】で「ある」と回答した施設への質問)

【1】 受け入れた人数をお教え下さい (項目該当数 25)

年	2006-10	2011-15	2016	2017	2018	2019
利用者 0 人の施設数	16	14	16	16	11	13
1 人	6	4	5	6	10	6
2 人	1	3	2	1	2	3
3 人	1	2	0	0	0	1
3人以上	0	1 (6人) *	1 (6人)	1 (8人)	1 (5人)	1 (7人)
無回答	1	1	1	1	1	1

* カッコ()内は、受け入れの具体的人数

年	2006-10	2011-15	2016	2017	2018	2019
利用者数 / 受入施設 **	0.46*	0.92*	0.63	0.67	0.79	0.92
利用された施設 / 受入施設 ***	33.3% (8)	41.7% (10)	33.3% (8)	33.3% (8)	54.2% (13)	45.8% (11)

* 5 年間の各年平均

** 受入経験のある 1 施設あたりの、その年の利用者数

*** 上段：受入経験のある施設のうち、利用者有の施設の割合 下段：施設数

【2-1】受け入れることに懸念がありましたか (項目該当数 25)

1. なかった 64.0% (15) 2. あった 32.0% (8) → 設問【2-2】へ
0. 無回答 8% (2)

【2-2】 (自由記述) できれば懸念の内容をお聞かせください (項目該当数 8)

記述あり 100.0% (8) 記述なし 0.0% (0)

(記述内容)

職員や利用者による偏見や差別のおそれ(5)、陽性者への「関わり」方の途惑い(3)、医療機関とのつながり(3)、個人情報共有範囲(1)、等。

【6-1】受け入れについて、工夫されていることがありますか(プログラム、居室など)

(項目該当数 25)

1. ない 36.0% (9) 2. ある 56.0% (14) →設問【6-2】へ
0. 無回答 12.0% (2)

【6-2】(自由記述)できれば具体的にお聞かせ下さい (項目該当数 14)

記述あり 100.0% (14) 記述なし 0.0% (0)

(記述内容)

HIV を理解し感染予防(肝炎や風邪を含む)をはかる「勉強会」を施設で開催する(13)。そのために講師を保健師等外部の専門家に依頼し(4)、外部の研修会等に参加する(1)。「切り傷の対処方法」を学び(1)、「使用したカミソリ」の廃棄や「使いすて手ぶくろ」の設置をした(1)。居室を個室にした(1)、等。

【7-1】 HIV について、知りたいこと、気にされていることがありますか(項目該当数 25)

1. ない 68.0% (17) 2. ある 16.0% (4) →設問【7-2】へ
0. 無回答 12.0% (3)

【7-2】(自由記述)できれば具体的にお聞かせ下さい (項目該当数 4)

記述あり 100.0% (4) 記述なし 0.0% (0)

(記述内容)

より詳しい知識と正しい理解を得たい(2)、治療のメンタルへの影響の有無(1)、新規感染や梅毒等他の感染症の動向(1)について知りたい、等。

【8】(複数回答)受け入れた際、HIV 感染に関する情報開示の範囲は以下のどれですか (項目該当数 25)

- | | |
|--------------------------------|------------|
| 1. HIV 感染を利用者、スタッフともにオープンにしていた | 32.0% (8) |
| 2. 一部スタッフだけで共有していた | 20.0% (5) |
| 3. 本人と相談して個別に決めていた | 56.0% (14) |
| 4. その他(記述内容：スタッフで共有) | 4.0% (1) |

D HIV の現状について伺います

【1】 HIV の現状に関して知っていただきたいことをいくつか挙げました。すでにご存知のことすべてに○をつけてください。（全ての施設への質問）

